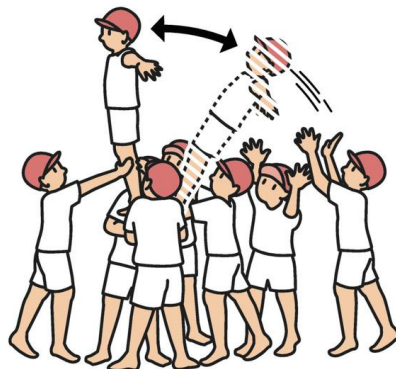


組み体操「人間起こし」 16～18年度に事故145件

中日新聞、社会、2019年11月12日

「人間起こし」



全国の学校で事故が相次いだ運動会の組み体操で、四つんばいの児童や生徒が重なる「ピラミッド」などに代わって人気の「人間起こし（トラストフォール）」でも、2016～18年度の3年間に計145件の事故が起きていたことが分かった。けがの部位は頭部が43件で最多。重篤な後遺症につながりかねず、専門家は注意を呼び掛けている。

人間起こしは複数でつくる土台の上に1人が立ち、後ろ向きに倒れたところを土台の児童や生徒が受けとめる技。大阪経済大の西山豊名誉教授が学校でのけがに医療費を給付する日本スポーツ振興センターのデータを分析したところ、小中高で発生した145件のうち兵庫県の30件が最も多く、大阪18件、埼玉13件と続いた。愛知は12件で4番目の多さ。長野と三重が2件、岐阜と滋賀が1件、福井はゼロ件だった。

負傷の部位は脳振とうや打撲など頭部が最多で、大けがにつながる恐れがある首も17件あった。捻挫や打撲が多いが、腕や足などの骨折も21件あった。上段に立つ人の事故が6割以上を占め、倒れたり起き上がったりにする際に落下する例が多いとみられる。

同センターによると、人が重なる「ピラミッド」や肩の上に立つ「タワー」など組み体操による事故は、11年度から4年連続で8千件を超えていた。しかし、スポーツ庁が16年3月、「確実に安全な状態」でなければ実施を見合わせるよう各自治体に通知してから年々減少した。

自治体ごとに高さの規制を導入するなどした結果、18年度は速報値で4146件まで減ったが、人間起こしは16年度が48、17年度は49件、18年度が48件と横ばいが続いている。

西山名誉教授は「人間起こしは、ピラミッドほど高さはないが、アクロバティックで見栄えがするため流行している」としたうえで、「危険性に違いはなく、実施を見合わせるべきだ」と訴えている。

(中日新聞・細川暁子)